



徐有利 (ソユリ) 著

『時代の顔——雑誌の表紙でみる近代』

(ソミョン出版、2016年)

서유리 『시대의 얼굴: 잡지 표지로 보는 근대』 (소명출판, 2016)

雑誌という近代の展示空間

本書は2016年に初版が発行され、2017年に重版されたものである。新刊とは言えないが、韓国・朝鮮半島の近代史や文化、メディア、デザインなどの多方面から読むことができる。2017年度大韓民国学術院選定優秀学術図書としても選ばれ、新聞媒体からも注目された。

本書において「顔」は、何かを認識させる確信的なイメージの比喩として用いられている。最初の雑誌とされる『親睦会会報』(1896年2月発行)や『独立協会会報』(1896年11月発行)以来、雑誌は時代をよく反映している媒体となった。

著者は雑誌の表紙を「展示空間」として見ている。この「展示空間」は、雑誌が主張することや内容と直結する政治的な空間である。特に近代の雑誌は、知識や情報だけでなく、理念や価値をも主張し、文化権力を表す装置だったのであり、雑誌の表紙は雑誌のメッセージを真っ先に伝える宣伝の空間であった。

近代の朝鮮半島(本書では韓国と表記)で発行された雑誌の多くは、植民地支配下の状況で検閲や発行禁止、押収などを克服しながら発行されたものである。雑誌は、知識人たちが帝国と争うための武器のような意味も持っていた。1930年代からは言論資本が形成され、読者の規模が拡大し、商業的な雑誌が出版された。雑誌は少年や青年、新女性、帝国の国民、農民などのイメージを企画して自らがその企画されたアイデンティティを演じる主体となった。その表紙には、雑誌が標榜する理念や価値が含蓄され、表紙は読者を獲得しようとするイメージの戦いの場となった。

本書は1890年代後半から1940年代前半までの、国家存続が危うい時期から植民地化に抵抗するための啓蒙運動や、労働運動、帝国による強制動員の時期を雑誌の表紙とともに振り返る。著者が本書に掲載された近代雑誌の表紙は、58種の雑誌及び、外国の雑誌20種の表紙を含め、延べ391枚の膨大な数を全てカラー図版で収録しているので、本書はさらなる研究のための重要な資料として参考できると考えられる。

著者は、時代を生々しく反映している雑誌表紙のイメージを読み解きながら、そこから見える各時代の欲望や生活について説明している。読者は時代に対する想像を広げることができるだけでなく、印刷文化が広がり始めた近代における雑誌の歴史やデザイン史に関する知識も得ることができる。

顔貌性の政治学

雑誌は、表紙のイメージを通じて雑誌自らが主体として見せられると同時に、読者もその雑誌を選ぶことによって、主体に参加できるように企画されている。また、雑誌表紙のイメージを鑑賞し消費する人としての読者を企画する。それらの視覚作用をさせる最初の入り口になるのが雑誌の表紙である。著者はそれを「顔貌性(안면성)」というドゥレーズとガタリなどの哲学概念で説明している。顔貌性とは、何かものや人をそれとして「認識させる」核心的イメージを意味する。

著者は雑誌の表紙を分析する際に、まず基本的に図像学的方法を取っている。そしてもう一歩進んで、日常的に存在する記号を分析して、「当たり前」「自然なもの」とされているイデオロギー的意味を、その記号から剥がす。まるで実在しているかのように見えた雑誌の表紙イメージの作用を明らかにするこの作業は、「バルトの神話学」の方法だと言う(14頁)。

表紙に用いられた画家の作品や、写真を「神聖な」作品として作家論に沿って説明するのではなく、雑誌編集側の企画された意図と、その視覚作用を解明し、社会の時代背景、そして日本や西欧の図版などを参考しながら鋭く分析している。

どのイメージであれ、イメージそれ自身は力を発揮することができない。イメージを誰が選択し、誰が見るのか。そしてそこにはどのような命名が加わり、どのような意識と結合するかは、イメージの影響力を決定する重要な変数である(286頁)。

著者はいう。人は、目にするイメージの「全て」から影響を受けるのではなく、認識できるものや、「見える」ものだけを選択的に観ていると(17頁)。このような視線作用に注目している分析は、各表紙のイメージとともに分かりやすく示されている。

幅広い著者の視野

筆者が著者・徐有利(ソユリ)について知ったきっかけは、光州抗争(5・18 光州民衆抗争)以降、光州ではじまった市民美術学校の活動や、一般市民の表現について調べていた際に徐有利による「黒いメディア、感覚の共同体：1980年代の市民美術学校と民衆版画の流れ」という論文だった。美術家たちが社会の多様な構成員(大学生や主婦、会社員、労働者など)に出会い、一時的ながら共同体のような関係を形成、美術活動を通じた民主化の感覚を覚える過程と版画の存在が興味深かった。

徐有利は、韓国近代美術史を専門とする美術史家であるが、その関心は、デザイン史や視覚文化、美術運動研究など、受容する側との相互作用を見せる視覚文化に広く行き届いている。著者の関心はこれまで「1910～20年代韓国の風景画研究」や「前衛意識と韓国の美術運動」「タクチ本(택지본)小説の表紙デザイン研究」「韓国近代の幾何学的抽象言説」などの論文や共著からも分かるように多方面に渡る。美術史研究をベースとしながらも幅広い視野を持つ著者が、その力量を遺憾なく発揮した産物が本書ではないか。

本書の構成

本書は雑誌表紙の変遷と特徴を時系列に並べている。具体的には次の4つの章で構成されている。第1章「国家と青年のイメージ—1890年代から1910年代までの雑誌表紙」では、韓国雑誌が発行されはじめた1890年代後半から日本帝国に植民地化される1910年代まで、すなわち朝鮮から大韓帝国の移行する時期に発行された『独立協会会報』などの表紙に、太極旗や朝鮮半島（韓半島）の地図、朝鮮王朝を象徴する梨花の模様が用いられた。だが、まだ同時期には「国民」のような主体は企画されていなかった。1900年代から『少年』や『青春』などではじめて、雑誌は「海上少年」や「虎青年」などのイメージで自らを主体化し、読者にも雑誌が装う主体と「なる」ことを呼びかけるようになった。

第2章「女性と子供の登場—1920年代雑誌表紙」では、近代女性に期待される価値を良妻賢母や新女性、都会の女性など、女性の読者に同一視を呼びかけるイメージが雑誌に登場しており、理想的な子供、模範的な学生のイメージとして西欧の演出された子供の写真やイラストが用いられたり、啓蒙の視覚作用をしていたことも分かる。

第3章「労働者大衆と神話的闘志のイメージ—1930年代雑誌表紙」では、男性を対象にする時事総合雑誌や社会主義理念を標榜する雑誌の表紙を分析している。時事総合雑誌には、神話的闘志や民衆啓蒙の主体としての男性のイメージを提示し、同一視を促す。魅力的な女性や、美しい自然なども表紙に登場させ、そのイメージを鑑賞（消費）する主体として男性読者を位置付ける。また、社会主義系列の雑誌ではソ連のポスターデザインや写真などを用いてソ連をモデルとする社会主義青年に「なる」ことを呼びかける。

最後に第4章「戦時国民をつくる—1940年代前半の官製雑誌の表紙」では、総督府による雑誌の統合や統制が強く働き、戦時体制の国民として「単一主体になる」ことが強調される。同じポーズをとっている集団のイメージは、戦争準備をする戦力となることを強要した。また、増産に励む農村女性の理想化されたイメージは、銃後の労働力が女性に期待されていたことを見せる。

雑誌表紙を通じた近代視覚文化の包括的な研究

韓国で印刷媒体にみる美術に関する研究は、切手や一部の雑誌表紙にみる女性像、挿絵など、純粋美術というカテゴリの「外部」におかれた豊富なイメージをとりあげ、美術史的研究の枠組みに「包摂」しようとしていた。また、日常的なイメージの中から、近代性を分析し、近代視覚文化研究の可能性を見せた。

それに比べて、本書は大衆媒体（雑誌）に見るイメージを「美術作品」として見ようとしたり、美術史研究に含めようとしたりせず、「イメージの政治」という観点から分析に用いている。媒体とイメージを、それぞれ「言論」と「美術」で分離させず、その両者が結合してどのような効果を生み出したのか、大衆をどのように啓蒙し、呼びかけ、魅了させたのかなどを一点一点の表紙を確認しながら、具体的に示している。そのため、著者は確認できる全ての雑誌表紙を取集し、時代別に整理する資料調査を行なった。このような著者の努力に敬意を表したい。

「イメージの近代劇場が新しい主体のイメージを想像させ」「新しい主体を企画して想像」することは近代韓国に限る話ではない（5頁）。本書を読んだ後、読者は、日常で目にするイメージが新しく見え、それらのイメージで今の時代が何を欲望し、何を語りかけているかを考える視点を得られるだろう。